

結果可能に関する日中対照

A Comparative Study of Chinese and Japanese Result-Potential Expressions

周 国龍*

Guo long ZHOU

Abstract

日本語には有対動詞がある。無意志自動詞表現は他動詞表現、他動詞の可能表現と相互補完関係にある。他動詞は動作主の行為を表し、その過去形は行為の結果を含む場合も多い。また他動詞の可能表現は動作主の行為を行うことができる能力の有無を表し、無意志自動詞は基本的に物事の素質を表すが、行為の過去形でその結果を表すこともできる。いわゆる結果可能表現である。中国語には「動作主+V+得（不）+R」、「物事+V+得（不）+R」構文があり、ほぼ日本語の他動詞表現と無意志自動詞表現に対応できる。

本稿は何故日本語では無意志自動詞表現が多用され、しかも結果可能の意味が含有されるかという視点から、日本語と中国語との異なる文構造、日本語の他動詞表現の機能、無意志自動詞表現の機能と中国語の「動作主+V+得（不）+R」、「物事+V+得（不）+R」構文の機能の異同点について検討した。

キーワード：結果可能，他動詞，無意志自動詞，「動作主+V+得（不）+R」構文，
「物事+V+得（不）+R」構文

はじめに

日本語の有対無意志自動詞（以下無意志自動詞とする）は行為の受け手の変化の結果を表し、そこに可能の意味が含有されると解釈する研究が数多くある^(注1)。その中、張(1998)は中国語を母語とする日本語学習者（以下学習者）は母語干渉により無意志自動詞には可能を表す「れる」、「られる」をつけることができないにもかかわらず、「れる」、「られる」を付けたりしてよく誤用になるという点を指摘し、その誤用の原因を究明した結論として日本語の無意志自動詞表現には「れる」、「られる」を付けなくても既に可能の意味が含有されているとして、このような無意志自動詞を用いた表現を「結果可能表現」と名付けた。

周（2014）は学習者の無意志自動詞のこのような誤用の原因について次のように指摘した。

*本学教授、対照言語学（Contrastive Linguistics）

1. 無意志自動詞表現は結果可能の意味を含む表現ではあるが、可能表現の形式として成立するには動作主の意志性が必ず必要なのに、無意志自動詞は動作主の意志性が顕在されていないため、可能表現の形式が用いられないところにギャップが生じている。
2. 中国語の可能表現は動作主の意志性があり、可能表現の形式も用いられている。
3. 可能表現において、中国語は必ず可能表現の形式を用いられなければならないのに対し、日本語の無意志自動詞は可能表現の形式が用いられなくても可能表現として理解される。この日中両言語の表現方法の違いが原因で、学習者が当たり前のように既に可能の意味を含有する無意志自動詞にも「れる」「られる」を付けなければならないと勘違いし、誤用が起きるわけである。

日本語の有対動詞において他動詞の過去形は動作主の受け手に対する行為に着目した表現であり、行為の結果まで含意することが多い。これに対し、無意志自動詞は行為の受け手の変化の結果に着目した表現である。他動詞と無意志自動詞のこのような補完的な機能が日本語に備わっていると言えよう。また、多くの場合、日本語の表現は主に行為を表す他動詞ではなく、変化の結果を表す無意志自動詞を使うのが好まれるようである。言い換えれば、動作主の行為に着目した表現ではなく、行為の受け手の変化した結果に着目した表現が好まれる。一方、中国語では他動詞の過去形は行為自身の完了を表すだけで、行為の結果の如何は補語によって補って表現しなければならない。動詞だけで結果まで表す表現は日本語と比べて少ない。つまり、中国語の表現は動作主の意志を含める動詞による行為を中心にした表現である。このような違いは可能表現にも現れる。日本語では他動詞の可能表現を用いることも当然たくさんあるが、できるならば、受け手が行為を受けて結果を表す無意志自動詞が多く使われる。これに対し、中国語は多くの場合、動詞を用いて行為を表し、その結果を補語成分として自動詞か形容詞で表す。すなわち通常「動詞+得+補語」（以下 V+得+R とする）の形式を用いて表現するのである。この場合、焦点は補語成分にあるとはいえ、動詞が用いられる分、動作主の存在も完全に無視できるものではないと言えよう。

無意志自動詞に結果可能の意味を含有するのが偶発的なものではなく、体系上他動詞との補完的な機能があると考えられる。本稿はこれについて考察し、その上、中国語の「V+得+R」構造の機能、そして可能表現に関する日本語と中国語との異同点を検討する。

1. 日本語と中国語の動詞による行為の結果の表し方

日本語の他動詞の多くはその過去形で行為そのものとその結果を表し、無意志自動詞は行為の結果を表す。基本的に他動詞表現では動作主が存在し、行為をする意志性も含有する表現になるが、無意志自動詞表現は受け手の変化（或いは不変化）の結果が焦点になるため、動作主の存在は焦点にならず、その意志性も顕在されない。また、表現から被害の

意味が読み取れない場合、他動詞も無意志自動詞も受け身表現には用いられない。

1. (私は) 車を直した。
- × 2. 車は私に直された。
3. 車が直った。
- × 4. 車が直られた。

例 1 の場合、文脈がなければ動作主が自ずと話し手になるし、文脈、場面があれば、動作主が話し手でなくても容易に推測されるだろう。例 3 では行為の受け手の車が故障した状態から変化して「直った」という結果だけを表し、動作主からの行為の有無については何も直接言及されていない。例 2 は通常車が直ったことはいいことで、直ったことによって害を被ることは殆ど考えられないため、無意志自動詞は勿論、他動詞もその受け身の形式は用いられない。以上の日本語を中国語で表現すると次のようになる。

5. 我把车修好了。
6. 车修好了。
7. 车被修好了。

動作主が主語の位置にあつて、その行為による結果を表現する場合においても、受け手が主語の位置にある表現においてもどれも動作主の行為を表す動詞「修」が必要であり、その行為の結果も補語によって補わなければならない。「修」は他動詞であるが、受け手が主語の位置にあつて、例 6 「车修好了」のような表現においても受け身を表す「被」を使って、例 7 のような受け身表現にしても可能である。またいずれにしても日本語の表現と同じ意味にするために結果を表す「好」といった補語が必要になる。この点において、日本語の他動詞だけ、あるいは無意志自動詞だけで表せる表現とは異なる。もう一例をあげる。

8. (医者が) 彼の病気を治した。
9. 彼の病気が治った。
- × 10. 彼は病気が治された。

例 8 のように動作主の存在が意識されるであろうが、例 9 の「治した」の動作主は特に焦点にならず、病気が「治った」という結果だけ表現している。「病気が治った」ことは通常はいいことで、それにより被害を受けたといったことは考えられないため、例 10 の受け身の表現形式は使えない。

このように、日本語では動作主の行為を強調しようとするならば他動詞表現になり、行為の結果を強調しようとするならば無意志自動詞表現になる。どちらかが用いられれば表現が成立できるのに対し、中国語では同じ事柄を表す場合、「V+R」構文が必要になる。

11. 医生治好了他的病。
12. 他的病治好了。
13. 他的病被治好了。

例 11 において、動作主「医生」が主語の位置にあり、動作主「医生」が「治」という行為を行った結果、病気は「好了」となる。日本語の表現と違って結果を表す「好」といった補語は欠かせない。例 12 では、行為の受け手「他病的」が主語の位置にあり、行為を表す動詞の「治」に結果を補う「好」も欠かせない。受け手を焦点にした表現である。例 13 は行為の受け手「他病的」が主語の位置にあり、「被」が用いられたため、受け身表現の形式と理解されるであろう。日本語と違い、中国語は受け身形式の表現も可能である。例 12、例 13 はどちらも受け手が主語の位置にある表現である。動作主は現れていないが、行為を表す動詞が欠かせないため、行為をする動作主の存在が意識される表現形式であることが明らかである。その上、行為をした結果を表す補語も必須である。

このように、日本語は有対動詞で表現する場合、他動詞の過去形は動作主の行為を表すだけでなく、行為の結果も含めて表している。無意志自動詞は動作主が意識されずに、行為の結果を焦点に表現している。一方、中国語では動詞は行為を表すだけで、結果補語で補って行為の結果を表さなければならない。また、動作主が強く意識されれば、動作主が主語で用いられるが、結果を焦点に表現するならば、受け手を主語の位置におくこともできるし、被害の意味がなくても「被」を用いて動詞は受け身の表現形式としても使われる。いずれにしても表現の表に動作主が現れてはいないが、他動詞の使用で動作主の存在が強うかがえるはずである。このように、中国語において動作主の存在がいつも意識され、その行為の結果は補語で補わなければならないのである。

日本語において他動詞の過去形表現は動作主の行為に着目した表現であるのに対し、無意志自動詞は受け手の結果を中心に表す表現である。この点を見れば、主に行為を表す役割を担う他動詞と主に行為の結果を表す役割を担う無意志自動詞という役割分担ができていように思われる。この役割分担があるから、表現の意図により、他動詞で動作主の行為を表すか、無意志自動詞で結果だけ表すかという表現の使い分けが可能となるわけである。

一方、中国語は表現方法が異なっても動作主の行為を中心とする表現で、行為の結果は補語で補っている。日本語のように他動詞と自動詞をはっきり使い分けないが、表現の意図により、主語の位置にあるのが動作主か、受け手かで動作主の行為が顕在されるか否かの使い分けがある。また、被害があると認識されなければ、他動詞も自動詞も受け身表現は用いられない日本語と違って、中国語の受け身表現は被害の意識の有無にかかわらず用いられるようである。

2. 動詞の「ル形」について

以上、動詞の過去形の表現について日本語と中国語との異同について論じてきたが、動詞の「ル形」特に無意志自動詞の「ル形」についても考える必要がある。他動詞の「ル形」は主に動作主の意志、あるいはまだ実行されていない行為を表すが、無意志自動詞の

「ル形」は基本的に受け手の素質を表し、文脈により行為の結果を表す場合もあるが、結果可能の表現として使われても、事柄の素質を失わずに含有するものであると思われる。一方、中国語のいわゆる結果可能表現の「V+得(不)+R」という構文には物事の素質を含有するが、他動詞が省略されにくいところから見れば、動作主の存在の色合いの濃淡があるにしても存在することには変わらない。

以下、日本語の無意志自動詞、中国語の「V+得(不)+R」構文についてそれぞれ考察し、そしてその異同点について明らかにしたい。

日本語の無意志自動詞の「ル形」には物事の素質のみを表す機能がある。物事の素質のみを表す場合、文脈を付けても変化した結果を表すことにはならない。

14. 水と油はよく混ざらない。

15. 新幹線の窓は開かない。

×16. 無理すれば、水と油はよく混ざる。

×17. 無理すれば、新幹線の窓は開く。

例 14、例 15 はそれぞれの素質のみを表す表現である。変化を期待して、意図的に働きかけて変化を起こさせようとしても、何か変化した新しい結果が起きることは望めないような無意志自動詞表現である。

このような無意志自動詞の「ル形」には同じく事柄の素質を含有するが、文脈を加え、働きかけを受ければ事柄の変化した結果を表す機能もある。この場合においても物事の基本的な素質を含有することには変わらない。この変化した結果を表す無意志自動詞の表現がいわゆる結果可能の表現になる。肯定的な結果可能もあれば、否定的な結果可能もありうる。

18. 女の人は高い声は出るが、低い声は出ない。

19. (もう少し押せば) 傘はかばんに入ります。

20. (押しても) 傘はかばんに入りません。

21. (彼は薬を飲めば) 彼の病気が治ります。

22. (彼は薬を飲んでも) 彼の病気が治りません。

これらも基本的に事柄の素質を焦点に論じているが、文脈が想像されれば、その文脈により変化が起き、受け手に関する何らかの結果が生じる。文脈により変化が起こりうる場合、働きかけて行為を起こす動作主の意志が潜在的に存在する。ただ無意志自動詞の表現形式上、これは何らかの行為を受けて受け手が変化した結果だけ表しているため、動作主の働きかけた行為というよりも受け手の変化した結果を焦点に表現していると理解してよかろう。このような無意志自動詞を用いた表現は少なくとも顕在的に動作主の意志、能力については言及せず、受け手の変化した結果を表すだけになる。言い換えれば、無意志自動詞の表現形式上では動作主を表す表現が入る余地はないと言えよう。もし、動作主の行為を焦点に論じるならば、動作主の意志、能力について言及することになる。当然、明ら

かに動作主が存在することになる。動作主の能力に言及することで、動作主にとってプラスになる事ならまだしも、動作主にとってはマイナスになるようなことであれば、話し手としては避けたいような表現になるであろう。

23. 女の人が高い声は出せるが、低い声は出せない。

24. 傘はかばんに入れられません。

例 23 は例 18 と違って、女の人の素質についてではなく、動作主の女の人の能力を焦点とする表現になる。ここでは高い声、あるいは低い声を出す能力の有無になる。可能の表現形式は主に動作主に関する能力が焦点になるのであるが、これはどちらかというと女の素質に近い能力についての話なので、「出せる」つまりその能力があるにしても、「出せない」つまりその能力がないにしても、特定の女性が傷つくようなことはあまり考えられないであろう。例 24 も動作主の行為をする能力の有無が焦点になるが、入れることができないとしてもかばんの大きさと傘の長さといった関係によるところが大きく、動作主で工夫する余地はそれほど大きくない分、動作主の能力の有無はそれほど問題にならないであろう。

25. A : ここに車を止めてはいけませんよ。

26. B1 : すみません。故障して動かないんです。

B2 : すみません。故障して動かせないんです。

例 26 B1 では、「動かない」は故障した「車が動く」という素質が既になくなった状態にあることを意味し、動作主の努力、能力については言及されていない。例 26 B2 の「動かせない」は「車が故障した」という事柄の素質を焦点にしたわけではなく、動作主の行為をする意志、能力に焦点が移ったことになる。つまり動作主の能力が問われ、「故障した」車を動かす能力は持ち合わせていないという意味になる。もし、動作主が車を動かす能力があり、動かす意志があるような場合、話し手は「すみません、今から動かします」となるであろう。例 26 B2 のような他動詞の可能表現では、動作主にとってマイナス的な意味はまだそれほど強く感じられないにしても、例 26B1 のような事柄側から表現する無意志自動詞表現のほうがより無難であることが分かるであろう。

次の例のようになれば、動作主のプライドは傷つくことになりかねない。

27. 彼の病気は治せます。

28. 彼の病気は治せません。

29. 彼の病気は治りません。

他動詞の可能形を用いれば、行為をする動作主にまつわる能力の有無に言及することになる。「彼の病気は治せます」と肯定的に言った場合なら特に問題にならないであろうが、「治せない」即ち治す能力がないと受け取られやすい表現は医者にとってはそのプライドにかけてなかなか言い出せないであろうし、話し手も動作主の医者に対して言うのをためらうであろう。この点からみれば、他動詞の可能表現を使う場合、事柄の素質についてで

はなく、動作主の素質、及び動作主が行為をするにあたって、その能力の有無にかかわる表現になるわけである。例 29 のように、受け手の病気の素質から言えば「治りません」のだから、直接に医者への能力への言及を避けることができるわけである。

以上のような表現を見てくれば、日本語において動作主が傷つくようなマイナス的な意味の他動詞表現は避けてしかるべきであろう。無意志自動詞による事柄の素質について表現するのなら動作主を傷つけることを避けられることが明らかであろう。

このように見てくると、日本語の他動詞の可能表現と無意志自動詞で同じく可能を表すことができるにしてもそれぞれの役割が異なることが分かる。また、日本語のような相手に気を使う言語は無意志自動詞による表現の存在理由もおおのずとわかるし、正しく使い分けをする必要があることも理解できるであろう。

3. 中国語の可能表現について

以上のような日本語の他動詞の可能形と無意志自動詞の「ル形」の表現を中国語に訳す場合、次のように「V（動詞）+得（不）+R（補語）」（以下 V+得+R、V+不+R とする）の形式で表現することは多いであろう。しかし、ここから日本語とのずれが生じてこないか、生じたとすれば、どのように違うのか、それについて考えてみる必要がある。

杉村（1997）は「V 得 R」は V という動作行為を経て R という事態が生まれる/生まれている。「V（不）R」は「V という動作行為を経ても R という事態が生まれない/生まれていない」という意味を表す。結果補語は動作行為の結果として「導致」された事態を表す成分であり、品詞的には形容詞と一部の自動詞（及び「自他兼用」の動詞）がその任に当たる」と指摘している。中国語のこの類の表現は主にその結果を表す表現ではあるが、結果補語は動作行為によって「導致」された結果だから、行為をする動作主が存在することも強く示唆されるわけである。従って、中国語のこのような結果可能表現は日本語の他動詞の可能表現と無意志自動詞表現に対応すると考えられる。

まず、事柄の素質を表す場合、

- 30. 油和水混不到一起。（水と油はよく混ざらない。）
- 31. 新干线的窗户打不开。（新幹線の窓は開かない。）
- 32. 女性发得出高音，但发不出低音。（女の人は高い声は出るが、低い声は出ない。）

例 30 も、例 31 も素質を表す表現である。「油と水」、「窓」が主語の位置にあり、その素質を「V+不+R」構文で表している。例 32 は女性の発声の素質について論じている。この類の表現は行為を加えても変えようがない素質を表す表現である。今一つ物事の素質に言及するが、何らかの行為により、変化が起き、可能の結果を表す表現もある。

- 33. 书包里放得进雨伞。（傘がかばんに入る。）

书包の大きさ等から、傘が入るぐらいの素質を有していて、その上動作主の行為を加えれば、傘がかばんに入るという可能の結果が予想されることになる。

34. 黑板上的字擦不掉。(黑板の字はなかなか消えない。)

「黑板上的字」は文の主語の位置、「V+不+R」構文は述語の位置があり、客観的な事実を表す表現になる。黑板の字は消しにくい素質を有し、行為を加えても、その素質を変えることができなく、予想した結果が得られないことを意味している。

35. 他的病治得好。(彼の病気は治ります。)

「他的病」という物事は主語の位置にあり、「治得好」は「他的病」についての評価である。言ってみれば病気の素質から治る病気であることを言っている。治る素質があるからと言って、自然に治るということではなく、当然、その陰に病気を治す動作主の存在が必要になる。しかし、表現の形式上、基本的に病気の素質についての評価であるため、動作主の意志や能力については直接言及されていない。

このような表現は物事の素質を中心とする表現で、行為の働きかけを受けた結果を客観的に表している。このような表現において、動作主は表現に現れておらず、言わばその陰に隠れている存在になっている。だから、動作主の能力の有無に直接言及されていないように見えるわけである。しかし、動作主が表現の前面に出てきて、主語の位置にある場合、動作主の能力の有無が問われる表現になる。次の例を見よう。

36. 他擦得掉黑板上的字。(彼は黑板の字を消せる。)

37. 医生治得好他的病。(医者は彼の病気を治せる。)

例 36、37 のように、主語の位置に動作主が来ると、「V+得+R」は直接動作主の能力に言及し、「黑板の字」、「病気」に対する動作主の能力に言及することになる。動作主の行為の能力に直接言及することになるので、動作主の能力を肯定的な評価をする場合は特に問題なく普通に使っても差し支えないが、否定的な評価の場合、

38. 他擦不掉黑板上的字。(彼は黑板の字を消せない。)

言ってみれば、体力的に弱い等の事情も考えられやすい場合、力の大小といった割合単純な能力なら大して傷つく可能性は低いであろうが、

39. 我治不好他的病。(私は彼の病気を治せません。)

40. 你治不好他的病。(あなたは彼の病気を治せません。)

例 39 は医者プライドにかかるため、医者である話し手もなかなか口にできないような表現になろう。また、医者に向かって、「あなたは彼の病気を治せません」と言ったら、大変失礼になるであろう。動作主の能力の有無についての表現だから、その否定表現は自分が言うならば、自分のプライドが傷つく恐れがあり、他人が言うようならば失礼になりかねない。

このように、中国語は同じ動詞であっても、主語の位置にあるのが物事なのか、動作主なのかにより、表現の焦点が異なり、使用していい場合と使用してはいけない場合とに別れる。

中国語の「V+得(不)+R」文構造は物事を主語の位置に据えることもできるし、動作主

を主語の位置に据えることも可能である。物事が主語の位置にある場合、物事の素質を表すか、その素質に何らかの行為を加えて変化が起きれば、変化した結果を表すことも可能である。一方、動作主が主語の位置にあれば、その能力の有無に言及することになる。そのため、動作主の意図した結果がその行為によって実現できる場合は問題が起こらないが、実現ができない場合、動作主のプライドなどに関わる恐れがあり、失礼な表現になりかねないわけである。

4. 日本語と中国語の対照

日本語の無意志自動詞には二つの機能がある。

1. 物事の素質を表す。
2. 行為により変化して何らかの結果が生まれ、いわゆる結果可能表現となる。

1については特に論じる必要はないが、2において、行為によると言うが、その行為をする動作主は潜在的に存在しているにしても、無意志自動詞では顕在させることはできない。このため、無意志自動詞に「れる」、「られる」を付けて可能表現形式にすることはできないし、当然動作主が表に現れてくることもない。従って、無意志自動詞の「ル形」或いは「タ形」による結果可能という意味は基本的にその素質を表す表現であり、その文脈によって、動作主の存在を想像できる時にだけ、行為による変化の結果を表す結果可能の表現とすることが可能である。

一方、中国語には「物事+V+得（不）+R」と「動作主+V+得（不）+R」という二つの構文形式がある。「物事+V+得（不）+R」構文には主に次の二つの機能がある。

1. 物事の素質を表す。
2. 物事が主語の位置に据え、行為により変化して何らかの結果が実現できるという意味が生まれる。

「動作主+V+得（不）+R」には主に次のような機能がある。

3. 動作主を主語の位置に据え、動作主の能力により、働きかけて物事が変化した結果の有無を表す。

中国語の「V+得（不）+R」構文は、物事を主語の位置に据えることも動作主を主語の位置に据えることも可能である。物事が主語の位置にあれば、基本的に物事の素質を表すが、変化による行為の結果可能を表すこともある。ただ、この構文形式は動作主の存在は想像されやすい。また、3のように、動作主を主語の位置に据えることも可能であるが、その時に、動作主の行為によって、その意図した結果の実現可能の有無が焦点になり、動作主の行為をする能力の有無が問われることになる。従って、その疑問の表現も否定の表現もややもすれば直接動作主の能力を否定する表現になり、失礼になりかねないわけである。

日本語の無意志自動詞と中国語の「V+得+R」構文において上記1. 2はほぼ同じようなことを表すことができるが、3は中国語にあって、日本語の無意志自動詞にはない表現の

方法である。敢えて言えば、3に対応する表現としては、日本語の他動詞の可能表現の形式になる。このように見てくれば、「物事+V+得（不）+R」構文においても動作主の行為が含有される表現でもあるため、日本語の無意志自動詞表現とは異なる。まさにこのような違いが学習者にその動作主の行為が含意される表現であれば、日本語の無意志自動詞にも「れる」、「られる」を付けて可能表現の形式にすることができるという勘違いをさせたのではないだろうかと考えられるわけである。

終わりに

本稿はいわゆる無意志自動詞の結果可能について検討してきた。日本語の他動詞の過去形は結果を含む場合も多いが、無意志自動詞の過去形も結果を表すことができる。また、他動詞の可能形表現は話し手の能力を焦点にした表現で、肯定表現の場合は使っても差し支えないが、否定表現の場合は直接動作主の能力の否定につながり、失礼になりかねない。

日本語の無意志自動詞表現の機能は二種類ある。1. 基本的には物事の素質を表わす。2. 動作主の能力は直接言及せず、結果可能を表わす。他動詞の可能表現は動作主の能力を否定的に表現するような状態を避けるため、無意志自動詞が用いられるわけである。一方、中国語の「V+得（不）+R」構文には三種類の機能があった。これは中国語の動詞は基本的に他動詞で、「物事+V+得+R」構文の表現に動作主は顕在されていなくても動作主の存在は容易に想像される。これが原因で、「物事+V+得+R」構文において動作主の能力に言及していなくても「V+得+R」という構文形式に対する誤解が生じれば、学習者は日本語の無意志自動詞にも同じく動作主が存在すると誤認し、「れる」「られる」を付けたがるわけである。

本稿は日本語の他動詞の可能表現形式と無意志自動詞のそれぞれの機能、そしてその表現意図によっては使い分けをしていることについて検討した。またそれを中国語の「V+得+R」構文形式と比較をし、その異同点を検討してきた。中国語の「能+V+R」構文形式と日本語の可能表現との関係についても考える必要があると思われるが、次稿に譲りたい。

注

- 1：張威（1998）、姚艷玲（2008）、呂雷寧（2007）、（2008）等をご参照されたい。なお、例文の一部は参考文献より引用した。

参考文献

- 周国龍（2014）「結果可能表現について」『鈴鹿国際大学紀要』CAMPANA No. 21
 杉村博之（1997）「可能補語の考え方」『日本語と中国語の対照研究論文集』くろしお出版
 張 威（1998）『結果可能表現の研究』くろしお出版
 姚 艷玲（2008）「〈不可能〉の言語化に関する日中両言語の対照研究」

- 『日本語と中国語の可能表現』 日中対照言語学会 白帝社
- 呂雷寧 (2007) 「可能という観点から見た日本語の無意志自動詞」
『ことばと文化』第8号 名古屋大学国際言語文化研究科
- 呂雷寧 (2008) 「無意志自動詞の可能表現に関わる要因の分析」
—意志性・主体性・事態の性質を中心に—
『ことばと文化』第9号 名古屋大学国際言語文化研究科

